

## 新生戯曲展 隠顕（いんけん）

### 配役

男／芳一：男性

尼僧：女性

滝夜叉姫：女性

亡霊 A（一ノ宮 蜘蛛丸[いちのみや くもまる]）：男性

亡霊 B（葛織 鬼神丸[くずおり きしんまる]）：男性

村人：男性

> 暗闇の中で命乞いをする。すべてを捨てても生きていたいという人の慾の塊。

> 動物的というより人間的に生きていたい（姑息、浅ましく）という事を吐露する。

芳一「生きたい、生きたい、生きていたい」

### 溶明

> 冷たく湿った風が頬に触れる早朝の深い森。

> まだ仄暗く静寂の中、耳を澄ますと獣の音が聴こえる。

> 気配を消し、ふらふらと迷い彷徨い、木々の揺れる音色を頼りに歩みを進める。

> 下を向いたまま笠のつばを手で押さえ安堵の声を漏らす。

男「・・・・・・・・」

### 明転

>いつの間にか森を抜けて小さな村へと辿り着く。

男「・・・・・・・・因果の森を抜けたか」

>客席に向けて何度もゆっくりと声を掛ける。

男「どなたか、おりませぬか」

>村人を探す様に顔は上げずに首をゆっくりと振り、観客席を見回す。

>客席に向けてゆっくりと声を掛ける。

男「どなたか、おりませぬか。儂は名も無き旅の僧でございます」

男「旅の途中、途に迷い此处へ辿り着いた次第」

>村人（客席側）に声を掛ける。

男「どなたか、おりませぬか」

>村人（客席側）がおもむろに声を掛けゆっくりと立ち上がる。

村人「ん、そこの坊さん途に迷いなさったか、この森はとてとても深いからのう」

男「此处二、三日。いや、もっと長い様に感じます、ずっとずっと途に迷い・・・・・・・・」

村人「そうかそうか、なら腹も減っていることじゃろ、なんもないが、にぎりめしひとつくらい

なら、罰もあたらんとうて」

男「かたじけない」

>村人から固く握られたにぎりめしを受け取り、ゆったりとした仕草で口へと運ぶ。

>にぎりめしを食べながら世間話を始める。ふと男の顔を見る。

村人「ん、お前様。目見えなんだか」

男「光がなくとも風や木々が色々な事を僕に教えてくれ、なんとか此处まで」

村人「そうかそうか、風や森は色んなことを教えてくれるからのう」

>にぎりめしを食べ終えて、村人に手を合わせる。

男「ごちそうさまです。助かりました。」

村人「いやいや」

男「何か僕に出来ること、お礼をさせてください」

村人「いやいや、坊さんからお礼だなんて貰えねえ」

男「それなら今から、この場所でひとつの物語を弾き語りしますから、気が向いた時に聴いて下さい。勿論、聴かなくても構いません。僕のただの気持ちですので」

村人「そんなら折角だから聴かせて貰おうかのう」

>ゆっくりと背負っていた琵琶を取り出し、お礼に琵琶を弾きながら語り出す。

男「ありがとうございます。それでは・・・・・・・・」

溶暗

>照明は薄暗くする。会場が無音になるまで待ち、その後に琵琶の音とともに弾き語りが始まる。

[弾き語り]

日々響く日照り日和の中

琵琶の音導く色伝う法師一人

赤間関（あかまがせき）の傘広げて縮図を眺め

右往左往あちらこちら指でなぞり

いつの間にか届く阿弥陀寺（あみだじ）

歪み淀む色彩を捉える不自由な瞳

見えずに聞こえ

気にせず背後（はいご）を捨て

許すも許さぬも無い

弱いなら弱いまま

上手に息も出来ぬほど強くなって何が残る

余った時間と向き合いとて

眠り眠れず

寝ない寝たふりして

偶然だと必然だと呟き言い訳し

もう二度と出逢えぬ分からぬふり

小さな過ちの数々

小さくて大きな間違い正して繰り返して

許さないとギロリと睨み

糸口を見つける瞬間に自然なほど笑みが浮かび上がる

ひとこと前を向き

どれだけ待てば良いのか

死んで詫びる言葉は明ける夜もあれ

超えて凌ぐ指の流れに魅了され

真っ白に埋め尽くされた見つめる先に何がいるのかを

声を変え徐々に徐々に霞みが左右に流れ晴れて去く

目の前の光景に誰もが恐れ

天地の蠢き瞳に映る絵図を消す様に瞑る

浮かび上がり仏さえ立ち入る事の出来ぬ壇ノ浦

一度きりの出逢いを求めた行く末

怒りや憎しみ合う戦の時間の合間を通り過ぎて忘れ

好奇の淫猥に彩られ塗られた視線の先に浮かばれぬ想い願い憎悪

もう手に入らない姫君の振り返り

もうこれ以上

もうあの日の笑顔を拝むのは夢ばかり

目醒め途惑う手足の行き先は胸と足の付け根

真っ赤に染まった森の中

佇む一人

明転

>尼僧は、日に日に衰弱して行く芳一の姿を心配し声を掛ける。

尼僧「どうしたのです、芳一。毎晩遅く何処まで出掛けていますか」

芳一「・・・・・・・・」

尼僧「芳一、黙っていても分かりません。琵琶を持ち、誰と逢っているのです」

芳一「・・・・・・・・お待様のお屋敷に、琵琶を弾きに伺っております」

溶暗

>照明は薄暗くする。

[弾き語り]

この世は天国か地獄か楽園か背徳か妄想か現実か

何処も頼り無く手から滑り落ちる伝達と伝言の遊戯

英雄を無駄に創り上げ絡み合う磁場を奪う外様の行列

祖父と万苦を語り故郷の風景は真夏の夜の夢

血塗られた掌を見つめた瞬間

醒める無音の中

虫の羽音がどろりとした夜風に吞まれ

目眩に似た感情と困惑

喪失感じ自信無く刀が落ちて去く

手放せない未来と夢と希望と目標と人生

何も手放せないのならのろのろと進む事しか出来ぬ

すべて投げ捨てて身軽になればと

喋れど無気力の海に沈んで逝く

消えない過去を秘密と死守に挟まれて

ほろりゆるむ緊張と緩和の狭間で迷い

幼き呼び名かける故郷の風景映る瞳

信じていた当たり前の言葉遣い語るに堕ちる

明転

尼僧「芳一、あなたは今、大勢の亡霊に取り憑かれています」

芳一「・・・・・・・・」

> 芳一の全身に経文を描きながら

尼僧「このままでは取り殺されてしまう」

芳一「・・・・・・・・」

尼僧「経文が描いてある限り、亡霊には見えません。触れることも出来ません」

芳一「・・・・・・・・」

尼僧「決して声を出してはなりません。心で経文を唱え沈黙を守りなさい」

芳一「・・・・・・・・行って参ります」

溶暗

> 照明は薄暗くする。

[弾き語り]

曖昧な理屈と返答の遣り取り

神籬（ひもろぎ）頭を垂れる愚禿（ぐとく）

歩み足踏み固めて来た反吐が垂れ流したままの途

痛みで眠れぬ夜も鳴り響く嵐の如く

経を描き守りの衣を纏ったまま

裏切りの怨念から逃れる為に

堪らず両手で耳を塞ぎ

時が過ぎるのを待つ

聴こえる足音

左右からゆっくりとゆっくりと近づいて来る

気取られる訳には逝かぬ

墨で描いた経を己の心の弱さから崩し消し

怨霊に見つけられた鈍く光る両耳

ひとつの約束を守らせる為に

笑みを浮かべる目玉が溢れ出した口裂けと

獲物を獲り浮かれた一つ目の狩人

明転

> 芳一の探しに来る一ノ宮 蜘蛛丸と葛織 鬼神丸

一ノ宮 蜘蛛丸「何処だ、何処にいる芳一」

葛織 鬼神丸「姫がお前をお待ちかねだ、これ以上待たせるつもりか」

一ノ宮 蜘蛛丸「何処だ、何処に隠れている芳一」

葛織 鬼神丸「姫との約束を違えるというのか」

> 芳一は、震えながら一心不乱に祈り心の中でお経を唱える

> 一ノ宮 蜘蛛丸 と葛織鬼神丸は、怒りに震えながら、芳一の周りをぐるぐると探し回りながら  
いなくなる

> ゆっくりと滝夜叉姫が現れる。

芳一「・・・・・・・・」

滝夜叉姫「・・・・・・・・」

芳一「・・・・・・・・助かりました」

滝夜叉姫「芳一」

芳一「そ、その声は・・・・・・・・姫様」

滝夜叉姫「やはり、ここにおったか芳一、こそこそと隠れおって、それでも武士の端くれか」

芳一「命だけは、どうか命だけはお助け下さい」

滝夜叉姫「それほどまでに命が大切か。あの日、平家を裏切り私を汚し斬り捨てた事、忘れては  
おるまいな」

芳一「・・・・・・・・」

滝夜叉姫「返り血を浴び怨みから光を失い、身分を捨て隠れ墮ち、それでも生きていたいと申す  
か」

> 滝夜叉姫の怨念と恐怖から芳一は、つい両耳を手で塞いでしまい、両耳のみお経が消えてしま  
う

芳一「お、お許し下さい姫様」

> 滝夜叉姫は、お経が消えた芳一の両耳を見つめながら

滝夜叉姫「芳一よ。生きたいか、これからも」

芳一「はい、生きとう御座います。ずっとずっと生きていたいです」

滝夜叉姫「わかった。生きて我らの事を語り伝えよ。永遠に語り続けるがいい」

> 滝夜叉姫が芳一の耳を掴み引き千切る。

> 芳一は、両耳を押さえながら呻きのたうち回る

芳一「・・・・・・・・」

溶暗

> 照明は薄暗くする。

[弾き語り]

淫猥な指と殺意に満ちた視線が左の耳をもぎ取り

痛みと苦痛から歪む表情のまま

声を押し殺して握る数珠の弾けた濁いた音

狂喜に満ち満ちた目で右の耳をもぎ取り

真っ赤に染まった頬と震える手

涙を垂れ流し赦しを請う禱り

両耳を釣り針に刺し意気揚々とぶら下げながら

夜明け前に魑魅魍魎蠢く渦の中へ消えて逝く亡霊

死ぬ事を忘れ生きる事のみを与えられた慾に吞まれた肉塊よ

地獄と現世を繋ぎ永遠に呪い背負い語る琵琶法師

明転

男「これで、終わりです。平家の語り草のひとつ」

村人「ほう・・・・・・・・最後まで聴き入ってしまったわ」

男「お付き合い頂き、ありがとうございます」

村人「その後、芳一とやらは、どのように」

男「さあ、もう何百年も前の昔話ですから」

明転

> 去って行く男を見送りながら

村人「護るべきものを捨ててまで生き永らえたい人の慾か。怖いとう」

> 男は、ゆっくりと客席へ歩きながら笠を外し、耳が無い事を見せる。

> 溶暗

演出／脚本：宇里香菜

原作：小泉八雲（パトリック・ラフカディオ・ハーン）

1850 年生まれ、1896 年日本に帰化（46 歳）、1904 年逝去（54 歳）。